

阿佐ヶ谷教会



信友会 会報

11月例会報告（2018年11月25日開催）



聖書研究 旧約聖書 ホセア書

新年あけましておめでとうございます。

私たちは2019年、教会創立95周年を迎えます。信友会も1949年に発足した「家長会」から数えて70年になります。この間多くの兄弟、教師の努力に支えられて、学びと交わりの時を持ち、この歴史の一端を刻むことができましたことに感謝いたします。一方、私たちの思いとは異なり、国際社会での経済問題や紛争・貧困・格差の拡大など見逃すことができない課題も多くあることも見逃せません。

社会の平和を祈りつつ、寒い冬を本格的に迎えるこの季節、神の守りに支えられて新しい年の歩みを踏み出しましょう。

(Y.O)

預言者 ホセア

古屋治雄牧師

本年度は旧約の預言者を取り上げることになり、初回の「預言者 アモス」に続いて、今回は「預言者 ホセア」を取り上げることにします。旧約聖書に登場する預言書の順番は古い順に取り上げられておりません。預言書として最初に纏められたのはアモス書で、ほぼ同時代の預言書としては「ホセア書」が続きます。ホセアという名前は、ホシュアから来ており「主は救い給う」の意味があります。民数記13章8節に、モーセがカナンの地の偵察に各部族から一人選んで派遣したが、その中でエフライム族のヌンの子の「ホシュア」が選ばれますが、モーセは日常的にホシュアをヨシュアと呼んでいました。

ホセア書の時代

ホセアの活躍した時代は、北イスラエル王国のヤラベアムⅡ世の時代以降の紀元前8世紀で、北イスラエル王国が滅亡する紀元前722年以前迄です。南ユダ王国で活躍した預言者イザヤの少し前です。ホセアの出自は、北イスラエル王国のヤラベアムⅡ世の時代のベエリの子であること以外の記述はありません。アモス



スの場合、テコアの牧者の一人と言い、アモス書7章14節でベテルの祭司アマツヤに、「わたしは預言者ではない、預言者の弟子でもない。私は家畜を飼い、いちじく桑を栽培する者だ。」と言っています。旧約聖書の預言者は、家柄などに関係なく種々な背景を持った人々が神から直接召かれて預言者とされます。



ホセアの召命

預言者は神の警告を語るのに厳しい預言が多く民にとって耳障りの良い言葉ではありませんが、ホセア書の場合は、比べものにはならない衝撃的な神の命令から始まるのです。

1章2節に、「行け、淫行の女をめとり、淫行による子らを受け入れよ。この国は主から離れ、淫行にふけているからだ。」と命令され、3節でホセアはディブライムの娘ゴメルをめとります。男の子が生まれるとその子に「イズレエル」と名付けさせます。イズレエルは北イスラエルの肥沃な穀倉地帯ですが、神はこの地に流血の罰を下しイスラエルの支配を断つと言います。次に女の子が生まれますが、名前をロ・ルハマ（憐れまれぬ者）と、次に生まれた男の子にはロ・アンミ（わが民ではない）と名付けさせました。神は、もはやイスラエルの家を憐れまず、私の民ではなくあなたたちの神ではないと言うのです。

北イスラエルは、ヤロベアムⅡ世の時代に外敵の脅威が一時止み軍事・経済において安定した時でしたが、自己の欲求が強くなり民心に乱れが始まり国中でヤーウェの神との関係が崩れ、この地の神バアル神に傾倒して世相は乱れていたのです。安定していたヤロベアムⅡ世の後には、列王記下15章以下の通り政治的に次々と政権篡奪が続き王が数年毎に代わり、遂には北イスラエル王国は紀元前722年にアッシリアによって滅ぼされるのです。

ホセアの妻になったゴメルは、4章14節に「神殿娼婦と共にいけにえを捧げ」とあるように神殿娼婦であり、しかも子持ちでしたが、イスラエルが神ならざるものに心を移し、それに走っている罪の故にホセアにこの淫行の女を受け入れさせ、イスラエルの罪を担わせると言っているのです。

カナンの地元の信仰は、農業地帯特有の豊穰、多産の多神教が中心でバアル信仰もヤーウェ信仰とはかなり違った倫理です。ソロモンの死後、イスラエルは王国が南北に分断され、大部分が北イスラエル王国に属し、ユダとベニヤミンが南ユダ王国となりました。南ユダ王国の中心はエルサレムで聖所もここにおかれ南ユダ王国の宗教的儀式はここに集中できました。北イスラエル王国は、中心はサマリアでしたが他にもシケム、ベテルやギルガルなどにも聖所があり宗教儀式は集約されず、地元の多神教の信仰が入り込む素地ができたのです。アッシリアの治世では征服した土地に他の民族を入植させ、宗教文化を混合させて価値観を変化させました。新約の時代には、イスラエルの民は、サマリア人をまぜこぜの宗教・文化を持つ人々として軽蔑し、イスラエルと同じ民族とは認めていません。

預言者ホセアと神の裁き

ホセアは北イスラエル王国で活躍する預言者で特にベテルを中心にしておりました。上述の通りホセアの預言者としての登場は、通常の預言者とは違ったものでした。1章の1節でベエリの子ホセアのための記述でその背景は解りません。ホセア書の内容に農産物に詳しく、また祭司に厳しい視線があるので農業従事者や祭司の子孫であったかもしれません。1章2節の淫行の女の妻帯の命令、生まれてきた3人の子供に不吉な名前をつけさせました。ホセアの召命は、北イスラエルの民がヤーウェの神との正しい関係を崩壊させ、



神ならぬものに走っている。この関係の修復をホセアが担うこと。そういう境遇の中で預言者として立つことを求められました。妻ゴメルは、4章14節に「神殿娼婦と共にいけにえをささげているからだ」とあるように神殿娼婦であったと想像されます。

カナンの元々の信仰を考えると、豊穡と多産を祈る信仰です。ヤーウェ信仰の異質性から見ると、農業中心の地域では祭儀的には一般的な倫理観であったのではないかと思います。また、民はヤーウェ信仰も捨てておらず、バアル信仰との線引きがあいまいで矛盾を感じていない状況にありました。ホセアは本来のヤーウェ信仰に引き戻すために立ったのです。

2章7~15節では、バアル信仰の実態が示されています。「愛人たちについて行こう。パンと水、羊毛と麻、オリーブ油と飲み物をくれるのは彼らだ。」民はバアルがくれたと考えている品物等掲げ、物質的欲求を求める生活を希求しています。9節には、「初めの夫のもとに帰ろう あの時は今より幸せだった」と言い、ゴメルがホセアのもとを去ったことを暗示します。

ヤロブアムⅡ世の安定した治世の中、安易に自己の物質的幸福至上主義からバアル信仰に走った民に対してのホセアの警告は、神の告発としての預言です。4章1節から「主の言葉を聞け、イスラエルの人々よ。主はこの国の住民を告発される。この国には誠実さも慈しみも神を知ることもないからだ。呪い、欺き、人殺し、盗み、姦淫がはびこり 流血に流血が続いている」。4節では「もはや告発するな、もはや争うな。お前の民は祭司を告発する者のようだ。」ここでは、神の正義や神の平和に違反していると言っています。そもそも神との関係では、根拠なく一方的に告発されるものではありません。神の前に公正に裁かれる関係です。北イスラエル王国の人々は、感情的にではなく、客観的な立場から告発されているのです。

出エジプトの恵み

ホセアは、イスラエルの民に注がれた恵みと保護の根拠に出エジプトの恵みがあると言います。イスラエルの民が出エジプトの恵みに立っていることを深く受け止めるなら、北イスラエルで起こっていることは本来的ではないのです。神はエジプトの奴隷の家から導き出し、荒野の40年の後に、乳を蜜の流れる約束のカナンへ導いて下さったことを忘れるなどと言います。確かに出エジプトの出来事は一回限りであり、バアル信仰は一年の自然のサイクルの中での宗教儀式で安易に受け入れ易いのでしょう。聖書的な信仰から外れたイスラエルの民を糺すためにホセアは立たされたのです。ホセアは、2章17節で「エジプトから上ってきた日のように」、11章1節「まだ幼かったイスラエルをわたしは愛した。エジプトから彼を呼び出し、わが子とした。」12章10節、14節などで出エジプトの恵みに立ち返れと繰り返し語ります。

裁きをととしての救済

3章1節で、「行け、夫に愛されいながら姦淫する女を愛せよ。イスラエルの人々が他の神々に顔を向け、その干しぶどうの菓子を愛しても、主がなお彼らを愛されるように。」神は、ホセアから去った淫行の女を再び迎え入れよというのです。人間的な常識では受け入れられないであろう淫行の女を受け入れること、神は厳

しく裁いたイスラエルをなお、契約に生きる者として見捨てないというのです。ホセアは神のこのような思いを受けて預言者としての働きを担い続けています。

2章16節から、「イスラエルの救いの日」の小見出しでイスラエルの救済について語られています。出エジプトの恵み、バアルの信仰を断ち、激しい戦いを終える。そして豊かな恵みを与えて、不吉な名前の子供たちについてイズレエル（神が種を蒔く）、ロ・ルハマ（憐れまれぬ者）を憐れみ、ロ・アンミ（わが民でない者）に向かって「あなたはアンミ（わが民）という。」神は祝福の子として受け入れています。これらは、預言書の編纂の時にアモス書と同様に終末的な希望が加えられたと思われます。ホセアもまた厳しい裁きばかりでなく、裁きを貫いて神がイスラエルの民を救済すると語っているのです。しかし厳しい裁きも厳然としてあり、紀元前722年に北イスラエルはアッシリアにより滅ばされました。

（文責：玉澤武之）